

『両性具有 兄弟サンドイッチ～触れられるとトロリと蕩けて...～』

著：秀 香穂里

ill：いけや

「章吾さんのこと、.....すごく好きです。憧れていました」

「俺はどうなんだよ、先生」

「龍一くんのこと.....好きだよ」

「どちらかを選ぶことは？」

章吾におもしろそうな声音で問われて、悩み抜いた末に頭を横に振った。

「.....選べない。ふたりとも違った魅力があって、惹かれてしまうんです」

「ふふ、可愛いな。.....じゃ、龍一、ふたりで彰仁さんを分け合おうか？」

「兄貴と？」

うさんくさそうに言うが、その間も龍一は胸をこりこりと弄っている。肌は汗ばみ、男たちの視線に晒されて燃え上がりそうだ。

「仕方ねえな。ま、いいさ、俺のほうが絶対によくしてやるから」

「待って、.....その前に、僕.....」

「彰仁さん？」

章吾が前にかがみ込み、彰仁のそこに触れようとしている。ジッパーをいまにも下ろそうとする男の手を止め、彰仁は何度も息を吸い込んだ。

どうしよう。言うべきか秘密にしておくべきか。だけど、彼らを好きだと言ってしまった。本心のままに身体をゆだねたら、すぐにも秘密のありかを知られてしまう。

そのことを事前に言えば、少しはショックも薄れるだろうかと思う。いきなり、目にするよりかは。だけど、気味の悪い身体だと言われる可能性もある。

「なんでもどうぞ。私はあなたの言うことなら、どんなことでも受け止めますよ」

「俺も。こんなに夢中になったのは先生が初めてなんだ」

章吾と龍一に口々に言われ、やっと決心がついた。

震えるくちびるで、「僕.....」と囁く。喉がからからだ。

「僕、.....じつは、.....身体の一部が、女の子、なんです.....」

「身体の一部が？」

「——女の子？」

ふたりとも顔を見合わせている。それもそうだろう。たぶん、一度も目にしたことがないだろうから。覚悟を決めて、彰仁は立ち上がった。そして、ふたりの目の前でゆっくりとジーンズを脱ぐ。その下はボクサーパンツだ。先走り下着に濃い染みができているのが恥ずかしい。

「先生.....」

ごくりと息を呑む龍一の視線が、痛いぐらいだ。章吾も見守っている。

「ここ.....僕の、ここに、.....女の子のものが.....ついてるんです」

悩みを振り切ってボクサーパンツを脱ぎ落とし、びくんと勃起上がったペニスを掴んで上向けた。

「あ……！」

「これは……」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>